

旅僧

泉鏡花

青空文庫

上

去にし年秋のはじめ、汽船加能丸の百餘の乗客を搭載して、加州金石に向
 ひて、越前敦賀港を發するや、一天麗朗に微風船首を撫でて、海路の平穩を
 極めたるにも關はらず、乗客の面上に一片暗愁の雲は懸れり。

蓋し薄弱なる人間は、如何なる場合にも多くは己を恃む能はざるものなるが、其
 の最も不安心と感ずるは海上ならむ。

然れば平日然までに臆病ならざる輩も、船出の際は兎や角と縁起を祝ひ、御幣を擔
 ぐも多かり。「一人女」「二人坊主」は、暴風か、火災か、難破か、いづれにもせよ
 危険ありて、船を襲ふの兆なりと言傳へて、船頭は太く之を忌めり。其日の加能丸
 は偶然一人の旅僧を乗せたり。乗客の暗愁とは他なし、此の不祥を氣遣ふに
 ぞありける。

旅僧は年紀四十二三、全身黒く瘦せて、鼻隆く、眉濃く、耳許より頤、頤より鼻
 の下まで、短き髭は斑に生ひたり。懸けたる袈裟の色は褪せて、法衣の袖も破れたるが、

服装いでたちを見れば法華宗ほつけしうなり。甲板デツキの片隅かたすみに寂じやくまく寞まくとして、死灰しくわいの如ごとく跏趺ふざ坐ざせり。
 加越地方かゑつちほうは殊ことに門徒もんとしんしう眞宗きえしやおほ、歸依者きえしやおほ多ければ、船中せんちゆうの客きやくも又また門徒もんとしんしう七八分しちふを占しめたるに
 ぞ、然さらぬだに忌いまはしき此この「一人坊主ひとりぼうず」の、別わけて氷炭ひやうたん相容あひいれざる宗敵しうてきなりと思おも
 ふより、乞食こつじきの如ごとき法華僧ほつけそうは、恰あたかも加能丸かのうまるの滅亡めつぼうを宣告せんこくせむとて、惡魔あくまの遣つか
 したる使者ししやとしも見みえたりけむ、乗客等じようかくらは二人三人にんにん、彼方あなたこなた此方ひたひあつに額ひたひあつを鳩とゞめて呶々どゞ、
 時々とき／＼、法華僧ほつけそうを流晒しりめに懸かけたり。

旅僧たびそうは冷々然れい／＼ぜんとして、聞きこえよがしに風説うはさして惡様あしざまに罵ののしる聲こゑを耳みみにも入いれざりき。
 せめては四邊あたりにに心こころを置おきて、肩身かたみを狭せまくすくみ居あたらば、聊いさ／＼か恕じよする方ほうもあらむ、遠ゑん
 慮よもなく席せきを占しめて、落着おちつき澄すましたるが憎にくしとて、乗客じようかくの一人にんは衝つと其その前まへに進すすみ
 て、

「御出家ごしゆつげ、今日けふの御天氣おてんきは如何いかでせうな。」

旅僧たびそうは半眼はんがんに閉ふさぎたる眼めを開ひらきて、

「さればさ、先刻さつきから降ふらぬから、お天氣てんきでござらう。」と言いひつゝ空そらを打仰うちあふぎて、

「は、あ、是これはまた結構けつこうなお天氣てんきで、日本晴にっぽんばれと謂いふのでござる。」

此この暢氣のんきなる答こたへを聞ききて、渠かれは呆あきれながら、

「そりや、誰だつて知つてまさ、私は唯急に天氣模樣が變つて、風でも吹きやしまいかと、其をお聞き申すんでさあ。」

「那樣事は知らぬな。私は目下の空模樣さへお前さんに聞かれたので、やつと氣が着いたくらゐぢやもの。いや又雨が降らうが、風が吹かうが、そりや何もお天氣次第ぢや、此方の構ふこつちや無いてな。」

「飛んだ事を。風が吹いて耐るもんか。船だ、もし、私等御同様に船に乗つて居るんですぜ。」

と渠は良怒を帯びて聲高になりぬ。旅僧は少しも騒がず、

「成程、船に居て暴風雨に逢へば、船が覆るとでも謂ふ事かの。」

「知れたこつたわ。馬鹿々々しい。」

渠の次第に急込むほど、旅僧は益す落着きぬ。

「して又、船が覆れば生命を落さうかと云ふ、其の心配かな。いや詰らぬ心配ぢや。お前さんは何か（人相見）に、水難の相があるとでも言はれたことがありますかい。まづ／＼聞きなさい。さも無ければ那樣ことを恐がると云ふ理窟がないて。一體お前さんに限らず、乗合の方々も又然うぢや、初手から然ほど生命が危険だと思つたら、

船なんぞに乗らぬが可いて。また生命を介はずに乗ツた衆なら、風が吹かうが、船が覆らうが、那様事に頓着は無い筈ぢやが、恚う見渡した處では、誰方も怯氣々々もので居らるゝ様子ぢやが、さてく笑止千萬な、水に溺れやせぬかと、心配する様な者は、何の道はや平生から、後生の善い人ではあるまい。

先づひと天氣を問はうより、自分の胸に聞いて見るぢやて。

(己は難船に會ふやうなものか、何うぢや。)と、其處で胸が、(お前は随分罪を造つて居るから何うだか知れぬ。)と恚う答へられた日にや、覺悟もせずばなるまい。もし(否、悪い事をした覺もないから、那樣氣遣は些とも無い。)と恚うありや、何の雨風(ござらばござれぢや。喃、那樣ものではあるまいか。

して見るとお前さん方のおどくするのは、心に覺束ない處があるからで、罪を造つた者と見える。懺悔さつしやい、發心して坊主にでもならつしやい。(一人坊主)だと言うて騒いでござるから丁度可い、誰か私の弟子になりなさらんか、而して二三人坊主が出来りや、もう(一人坊主)ではなくなるから、頓と氣が濟んで可くござらう。一斯く言ひつゝ法華僧は哄然と大笑して、其まゝ其處に肱枕して、乗客等がいかに怒りしか、いかに罵りしかを、渠は眠りて知らざりしなり。

下

恠かくて、數時間すうじかんを經たりし後のち、身邊あたりの人聲ひとごゑの騷さわがしきに、旅僧たびそうは夢破ゆめやぶられて、唯とみ見
 れば變かはり易やすき秋あきの空そらの、何時いつしか一面いちめん搔かき曇もりて、暗澹あんたんたる雲くもの形かたちの、凄すさまじき飛ひてん夜や
 叉しやの如ごときが縱橫じゅうわう無盡むじんに馳はせるは、暴風雨あらしの軍いくさを催もよすならむ、其一そのいち團だんは早はやく既すでに沿えんが
 岸んの山やまの頂いたゞに屯またせり。

風かぜ一陣ひとしきり吹ふき出いでて、船ふねの動搖どうえう良激やほげしくなりぬ。恠かくの如ごとき風雲ふううんは、加能丸かのうまる既往きわう
 の航海かうかい史し上珍じやうめづらしからぬ現象げんしやうなれども、(一人坊主ひとりぼうず)の前兆ぜんてうに因よりて臆測おくそくせる
 乗じやう客かくは、恠かくる現象げんしやうを以もつて推すすべき、風雨ふううの程度ていどよりも、寧むしろ幾いく十倍じふばいの恐おそれを抱いだき
 て、渠かれさへあらずば無事ぶじなるべきにと、各々おのゝ我命わがのちを惜をしむ餘あまりに、其死そのしを欲ほつするに至いたるまで、
 怨恨骨髓うらみこつずゐに徹てつして、此この法華僧ほつげそうを憎にくみ合あへり。

不幸ふかうの僧そうはつく／＼此状このさまをみし、慨然がいぜんとして、

「あゝ、末世まつせだ、情なさけない。皆みんなが皆みなで、恠かう又信またしん仰かうの弱よわいといふは何どうしたものぢやな。
 此處こゝで死ぬしものか、死しなないものか、自分じぶんで判断はんだんをして、活いきると思おもへば平氣へいきで可よし、

死ぬと思や靜に未來を考へて、念佛の一つも唱へたら何うぢや、何方にした處が、わい
 く騒ぐことはない。はて、見苦しいわい。

然し私も出家の身で、人に心配を懸けては濟むまい。可し、可し。」
 と渠は獨り領きつゝ、從容として立上り、甲板の欄干に凭りて、犇き合へる乗
 客等を顧みて、

「いや、誰方もお騒ぎなさるな。もう斯うなつちや神佛の信心では皆の衆に埒があ
 きさうもないに依つて、唯私が居なければ大丈夫だと、一生懸命に信仰なさい、
 然うすれば屹度助かる。宜しいかく。南無、」

と一聲、高らかに題目を唱へも敢へず、法華僧は身を躍らして海に投ぜり。
 「身投だ、助ける。」

船長の命の下に、水夫は一躍して難に赴き、辛うじて法華僧を救ひ得たり。
 然りし後、此の(一人坊主)は、前とは正反對の位置に立ちて、乗合をして却りて
 我あるがために船の安全なるを確めしめぬ。

如何となれば、乗客等は爾く身を殺して仁を爲さむとせし、此大聖人の徳の宏
 大なる、天は其の報酬として渠に水難を與ふべき理由のあらざるを斷じ、恠る聖

僧と與にある者は、此結縁に因りて、必ず安全なる航行をなし得べしと信じたればなり。良時を経て乗客は、活佛——今新たに然か思へる——の周圍に集りて、一條の法話を聞かむことを希へり。漸く健康を回復したる法華僧は、喜んで之を諾し、打咳きつゝ語出しぬ。

「私は一體京都の者で、毎度此の金澤から越中の方へ出懸けるが、一度ある事は二度とやら、船で（一人坊主）になつて、乗合の衆に嫌はれるのは今度がこれで二度目でござる。今から二三年前のこと、其時は、船の出懸けから暴風雨模様でな、風も吹く、雨も降る。敦賀の宿で逡巡して、逗留した者が七分あつて、乗つたのはまあ三分ぢやつた。私も其時分は果敢ない者で、然云ふ天氣に船に乗るのは、實は二の足の方であつたが。出家の身で生命を惜むかと、人の思はくも恥かしくて、怯氣々々もので乗込みましたぢや。さて段々船の進むほど、風は荒くなる、波は荒れる、船は揺れる。其又揺れ方と謂うたら一通でなかつたので、吐くやら、呻くやら、大苦みで正體ない者が却つて可羨しいくらゐ、と云ふのは、氣の確なものほど、生命が案じられるでな、船が恚うぐつと傾く度に、はツくと冷い汗が出る。さてはや、念佛、題目、大聲に鯨波の聲を揚げて唸つて居たが、やがて其も蚊の鳴くやうに弱つてしまふ。取亂

さぬ者は一人もない。

恁云ふ私が矢張その、おい／＼泣いた連中ではな、面目もないこと。

昔彼の文覺と云ふ荒法師は、佐渡へ流される船路で、暴風雨に會つたが、船頭水夫共が目の色を變へて騒ぐにも頓着なく、大の字なりに寢そべつて、雷の如き高軒ぢや。

すると船頭共が、「恁悪僧が乗つて居るから龍神が祟るのに違ひない、疾く海の中へ投込んで、此方人等は助からう。」と寄つて集つて文覺を手籠にしようとする。

其時荒坊主岸破と起上り、舳に突立ツて、はつたと睨め付け、「いかに龍神不禮をすな、此船には文覺と云ふ法華の行者が乗つて居るぞ！」と大音に叱り付けたと謂ふ。

何と難有い信仰ではないか。強い信仰を持つて居る法師であつたから、到底龍神如きがこの俺を洗めることは出来ない、波浪不能没だ、と信じて疑はぬぢやから、其處でそれ自若として居られる。

又死んでも極樂へ確に行かれる身ぢやと固く信じて居る者は、恁云ふ時には驚かぬ。まあ那樣事は措いて、其時船の中で、些とも騒がぬ、いやも頓と平氣な人が二人あ

つた。美しい娘と可愛らしい男の兒ぢや。※弟と見えてな、似て居ました。

最初から二人對坐で、人交もせぬで何か睦まじさうに話をして居たが、皆がわ

い／＼言つて立騒ぐのを見ようともせず、まるで別世界に居るといふ顔色での。但

金石間近になつた時、甲板の方に何か知らん恐しい音がして、皆が、きやツ！と叫んだ

時ばかり、少し顔色を變へたぢや。別に仔細もなかつたと見えて、其内靜まつたが、※

弟は立ちさうにもせず、まことに常の通りに、澄して居たに因つて、餘り不思議に思つた

から、其日難なく港に着いて、※弟が建場の茶屋に腕車を雇ひながら休んで居る處へ行つ

て、言葉を懸けて見ようとしたが、其子達の氣高さ！貴さ！思はず此の天窗が下つたぢ

や。

そこで土間へ手を支へて、「何ういふ御修行が積んで、あのやうに生死の場合に平

氣でお在なされた」と、恐入つて尋ねました。

すると答には、「否、私等は東京へ修行に參つて居るものでござるが、今度國

許に父が急病と申す電報が懸つて、其で歸るのでござるが、急いで見舞はんけれ

ばなりませんので、止むを得ず船にしました。しかし父様には私達二人の外に、

子と云ふものはござらぬ、二人にもしもの事がありますれば、家は絶えてしまひます。

おとつさん 父様は善いお方で、其きり跡の斷えるやうな悪い事爲置かれた方ではありませんか、
 私どもは甚危い恐い目に出會ひましても、安心でございます。それに私が危ければ、
 この弟が助けてくれます、私もまた弟一人は殺しません。其で二人とも大丈夫と思ひま
 すから。少しも恐くはござらぬ。」と憍う云ふぢや。私にはこれまで讀んだ御經より、
 餘程難有くて涙が出た。まことに善知識、そのお庇で大きに悟りました。
 乗合の衆も何がなしに、自分で自分を信仰なさい。船が大丈夫と信じたら乗つて
 出る、出た上では甚※だと安心がならぬ、人を恃むより神佛を信するより、自分を信
 仰なざるが一 番ぢや。」
 船の港に着きけるまで懇に説聞かして、此殺身爲仁の高僧は、飄然として其名も
 告げず立去りにけり。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二」岩波書店

1942（昭和17）年9月30日第1刷発行

1973（昭和48）年12月3日第2刷発行

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2005年10月28日作成

2011年3月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

旅僧

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>